

# 続・道東沿岸の貝類相について

和歌山 満

## 1. はじめに

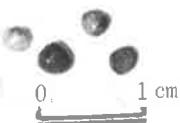
筆者は、本誌（1987第29号）にて、道東沿岸の貝類に関する報告をおこなった。本稿では、新たに38種類を追加記載し、若干の特徴を述べて続報とする。

## 2. 主な特徴

Table 1は、多板綱1科1種、腹足綱7科14種、斧足綱14科23種の合計38種を示したものである。採集地及び深度分布は、前報Fig. 2に対応させてある。

### (1) 稀少種・化石種について

本報告種の特色は、前報掲載種に比べて容易に観察・採集されることが少ない点である。チヤイロタマキビ *Temanella turrita* (A. ADAMS), クロスジムシロガイ *Reticunassa fratercula* (DUNKER), コムスマベイ *Buccinum bulimuloideum* DALL, チャイロカミオボラ *Volutopsis (NOV)* *Castaneus* (MÖRCH), ヤゲンバイ *Clinopegma unicum* damon (DALL), エゾタマキガイ *Glycymeris yessoensis* (SOWERBY), キキタノマユイガイ *Adula californiensis schmidti* (SCHRENCK), アズマニシキガイ *Chlamys farren* (JONES et PRESTON), マメシジミ *Pisidium japonicum* PILSBRY et HIRASE ナガウバトリガイ *Serripes laperousii* (DESHAYES), トバザクラガイ *Cadella lubrica* (GOULD), ヨコヤマスズガイ *Nettastomella japonica* (YOKOYAMA), 等がその例にあげられる。



PI. 1 現生マメシジミ

特筆すべき種としては、1976年本別公園近くの沢で生息が確認され（十勝の自然史研究会、1983）、北海道でも珍しいと称される淡水産マメシジミを厚内の湧水小沼跡に見ることが可能である（Pl. 1 参照）。

エゾタマキガイは、通常厚内オコッペ沢の地層中に含まれている種で、化石と関連づけることができる。同種は千葉県下の成田層群を構成する木下層から多数の個体が産出しており、その報告例は少なくない（千葉県教育センター、1982, 19）。前者は5～6千年前、後者は10万年前に生息していたことを物語っている訳で（Pl. 2 参照）、海水温や古地理的環境を推定する観点から、大層興味深い対象といえる。

### (2). 北方・寒流系を意味する和名、

前報でも言及したが、道東は千島寒流の影響下にある為、寒・北を意味する命名が多くある

## 目 次

続・道東沿岸の貝類相について.....	和歌山 満.....	2
斎藤米太郎と考古学.....	後藤 秀彦.....	6

## 軟体動物門

(凡例: \*陸産 ●汽水産)

綱	目	科名	種名	採集地		
				○潮間帶	×100m以浅	●100m以深
多板	新多板	ヒゲヒザラガイ	エゾババガセ	A K		
腹足	中腹足	チヤイロタマキビガイ	チヤイロタマキビ	A K		
		オリイレヨウバイ	クロスジムシロガイ	A K		
		アクキガイ	エゾツノオリイレガイ		A	
		エゾバイ	エゾチヂミボラ		A	
	新腹足	モロハバイ		S		
		コムスメバイ		S		
		フジタバイ			K	
		チヤイロカミオボラ			K	
		ウネエゾボラ			K	
		マルエゾボラ			K	
		ヤゲンバイ			K	
	有肺	コロモガイ	エゾコロモガイ		A	
		オナジマイマイ	*エゾマイマイ S			
		コハクガイ	*コハクガイ S.P. A			
斧足	糸鰓	タマキガイ	エゾタマキガイ		S	
		イガイ	A			
		エゾイガイ	A			
		キタノマユイガイ	K			
		クロタマエガイ		K		
		イタヤガイ	アズマニシキガイ	A		
	ザルガイ	イシガイ	*イシガイ K			
		エゾシラオガイ	エゾシラオガイ		S	
		ドブシジミガイ	*マメシジミ A			
		ナガウバトリガイ		S		
		コケライシカゲガイ		AK		
	真弁鰓	エゾイシカゲガイ		AK		
		シコロガイ	エゾワスレガイ		AK	
		アシガイ	エゾマスオガイ		A	
		ニツコウガイ	ベニサラガイ		S	
		トバザクラガイ		A		
	ニオガイ	キヌマトイガイ	チシマガイ		AK	
		エゾオオノガイ	エゾオオノガイ		S	
		キタノオオノガイ		A		
		ニオガイ	A			
		カモメガイ	A			
		ヨコヤマスズガイ	A			
		スエモノガイ	フクレスエモノガイ		S	

Table 1 道東に生息する貝類



PI. 2 化石エゾタマキガイ



(左) 厚内産 (右) 成田産

今回、エゾ、キタ、チシマを接頭語に持つ15種類を加えた結果、138種中49種あって、35.5%を占めた。

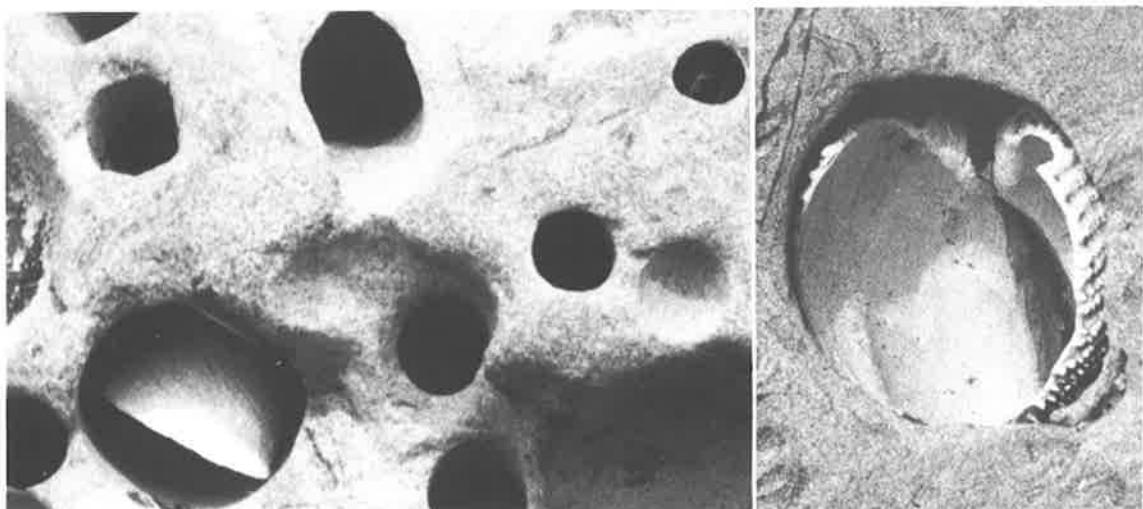
#### (3). 穿孔性二枚貝について

貝類の生活様式が変化に富んでいる為か、生態上注目すべき種類が数多く知られている。

ニオガイ科 (Family. Pholadidae) の数種は、岩底や岩壁に穿孔して巣穴生活をする。厚内の昆布刈石海岸でも岩礁中や破碎小岩中に、そうした種類が観察される。ニオガイ *Barnea (Anchomasa) manilensis inornata* PILSBRY, ニオ

ガイモドキ *Zirfaea subconstricta* (YOKOYAMA), カモメガイ *Pholadidea kamakurensis* (YOKOYAMA), カモメガイモドキ *Martesia striata* (LINNÉ), ヨコヤマズガイの5種類が灰白緑色の泥岩に、網目状のヤスリ殻表を密着回転させながらボーリングする (Pl. 3 参照)。

個体数が多く、大型に成長するニオガイモドキやカモメガイモドキに比べ、ニオガイ、ヨコヤマズガイは小型で、後者は稀有に近い数である。Pl. 3 に見る様な巣穴痕が化石として陸上に存在するならば、海底隆起の有力な証拠にな



PI. 3 ニオガイ科の巣穴とニオガイモドキの穿孔

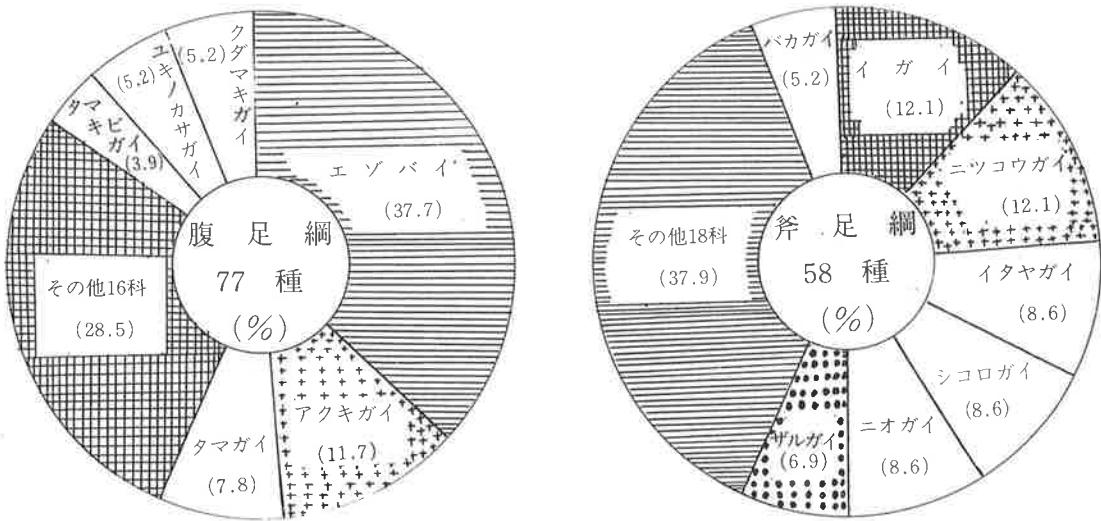


Fig. 1 科別種の割合

ることは確かである。

増田、松島（1969）によると、真鶴半島ではカモメガイが硬い安山岩中に穿孔しているという。道東沿岸においても確認を急ぐ必要がある様に思われる。

#### (4). 科レベルでみた種について

138種は決して多くはないが、一沿岸区の貝類相を捕える目安にはなるであろう。

Fig. 1 は、腹足と斧足の2綱に関して、科別にみた種の割合を%で表わしたものである。腹足綱が過半数を占め、斧足綱はやや少なめであると読みとれる。

巻き貝と呼ばれる77種では、エゾバイ科 (Family. Buccinidae) に分類される種類が約38%で、この地方では最も優勢なグループである。上述の結果は、エゾバイ科に属する種群が、環境条件の厳しい不安定な潮間帯より、むしろ安定な深度域に多く生息する傾向に起因すると考えられる。道東を代表する貝にふさわしいエゾボラ *Neptunea polycostata* (SCARLATO), エゾボラモドキ *Neptunea intersulpta* (SOWERBY), ナガバイ *Beringion marshalli* (DALL), オオカラフトバイ *Euccinum verkruzeni* KOBELT, クビレバイ *Buccinum opisthoplectum* (DALL), カラフトエゾボラ *Neptunea eulimatus* DALL, クリイロエゾボラ *Neptunea eulimata lamellosa*

GOLIKOV, ネジヌキバイ *Japelion hirasei* (PILSBRY), ミギマキタテゴトナシボラ *Pyurula fusus dexius* DALL, 等は百メートル前後に生きる肉食性大型種で、浅瀬には不適なサイズである。

二枚貝では、イタヤガイ科 (Family Pectinidae)、とニツコウガイ科 (Family. Tellinidae) に所属する種類が共に12%強で、優位を保っている。しかしながら分散傾向と理解する方が良い様に思える。遠浅の広く長い海を有せず、内湾も未発達な海岸地形からすれば、同科多種の繁殖を保障できる生態的環境は乏しい。よって渚から数十メートルの底質に限定を受けつつ、科レベルで生息空間を充填した結果と解釈できるであろう。また上記理由は、腹足類の優勢を逆説的に承認する海岸海底地形となるだろう。

近年深海性二枚貝が熱水や断層地形との関連で話題になっているが、当海域での採取は今だ不明であることを附記しておく。

#### 3. おわりに

採集標本に限定した2回にわたる報告で、道東沿岸の貝類相を明らかにしてきた。

8月、広尾町で開催された十勝海洋博覧会に貝類も展示品に加えられていた。海と生物に対する一般の関心が高まったにちがいない。これを機会

に、多くの方々の協力を得て、深海に至る海産種はもとより、空白に等しい池沼や内陸貝についてまで、より詳細な調査を継続せねばならぬ。

(千葉県松戸市立第一中学校教諭)

### 引用文献

石川政治 (1969) VENUS. Vol28. No1. 日本貝類学会

内田 享編 (1965) 新日本動物図鑑〔中〕 北隆館

奥谷喬司共著 (1967) 原色自然の手帖日本の貝講談社

木村泰治 (1982) 理科教育研究123号、千葉県教育センター

吉良哲明 (1959) 原色日本貝類図鑑、保育社  
十勝の自然史研究会編 (1983) 十勝の自然を歩く、北海道大学図書刊行会

波部忠重 (1967) 続原色日本貝類図鑑、保育社  
—— (1968) 日本の貝、保育社

——共著 (1965) 原色世界貝類図鑑Vol. 1. 保育社

—— (1967) 標準原色図鑑3貝、保育社

—— (1983) 貝I、II、学習研究社

増田孝一郎共著 (1969) VENUS. Vol28. No2 日本貝類学会

和歌山満 (1987) 浦幌町郷土博物館報告第29号、浦幌町郷土博物館

## 斎藤米太郎と考古学

### 後藤秀彦

斎藤米太郎は浦幌町が生んだ考古学者である。氏は、1908（明治41）年1月2日、北海道十勝郡浦幌村字下浦幌西1線北12番地（現・浦幌市街）に生を受けた。この時期の浦幌町は、1900（明治33）年に生剛外二ヶ村戸長役場を設置して行政的に独立し、さらに1903（明治36）年の根室本線の開通と浦幌駅の開業に伴い役場を浦幌市街に移転するとともに、1906（明治39）年4月1日には二級村制の施行に伴い「生剛村」となった直後であった。したがって、浦幌市街地は本格的な市街地づくりに着手したばかりの一面の湿地帯であったという。

嚴父は、小規模の畠地を自宅周辺で耕作していたらしいが、村内では「水汲みサイトウ」の名で呼ばれていた。それは、十勝川の一支流浦幌川流域の低湿地帯に形成された浦幌市街は、良質の飲用水に乏しく、住民の多数はわずかに良質の水の得られる現・浦幌神社脇の湧水に頼っていたからにほかならない。やがて、米太郎の父は一杯いくらで水を運搬することによって日々の生計を立てようになったようである。

古老の中には現在でも「水汲みサイトウ」の名で呼ぶ者は多い。

米太郎は1922（大正11）年、地元の十勝郡第二

浦幌尋常小学校（現・浦幌町立浦幌小学校）高等科第一学年を修了すると東京へ遊學し、私立大成中学校へ入学、1925（大正14）年3月、そこを第三学年で中退した。

その後の数年間の動向は不明である。

浦幌町立十勝小学校に保管されている米太郎の履歴書には、昭和12年8月25日「十勝郡大勝尋常小学校代用教員ヲ命ス月俸五拾円給與」とある。しかし、これより先、米太郎の著書『郷土先史民族砦趾』には昭和10年3月の日付けで「十勝郡大津村静内尋常小学校」とあり、本文中にも「昭九調」との記載が見られ、そのうちで最も早いものが「昭九・九・二五調」であることから、この時期には既に静内尋常小学校の代用教員として勤務していたものと思われる。その後、前述のように大勝尋常小学校へ転勤し、1937（昭和12）年10月には小学校准教員免許を、翌年9月には尋常小学校本科正教員免許を講習によって取得している。

なお、この履歴書では旧氏名を「渡辺米太郎」と、一時期母方の姓を名乗っていたことをうかがわせる記事があるほか、氏名のふりがなには「サイドウ」とあり濁音であることも知ることができる。

米太郎が歴史学、とりわけ考古学に関心をもつ